



<同志社人が母校を誇りに思える情報>

「同志社ファン・レポート」
Ver. 2-030 号（通巻 261 号）

「同志社人・有賀誠一氏」

(同志社大学院修了、カナダ合同教会引退牧師)



「いつまでも同志社を想う心」

今回久しぶりに東京でフルート演奏会を開くことにしたので、下記の案内状を発信したところ、「同志社ファンを増やす会」主宰の多田直彦氏から小文を書くようにとのお勧めを受けましたので、ここに、同志社への私の想いを綴ることにいたしました。

カナダと日本を結ぶ

フルートとピアノの調べ



フルート：有賀 誠一



ピアノ：佐藤いずみ

曲目：ヘンデル、テレマン、ベーム、フォーレ他

日時：2019年 7月6日（土）午後3時開演
(開場午後2時半)

会場：

東京都文京区西片 2-18-18
日本キリスト教団 西片町教会
(地下鉄「東大前」徒歩5分)

入場料：予約2500円
当日3000円

予約先：revariga@yahoo.ca

お名前と枚数を、前日までにお知らせください。



■ 私、私の家族、そして同志社ファミリー

この世に生を受けてから80年、同志社大学大学院を修了してから55年、日本を離れてから46年になりますが、同志社は今も私の心の故郷であり、また人生の指標でもあります。大学に4年間在学しただけでも私と同じような熱い想いを同志社に寄せている同級生を見ると、生まれるまえから同志社と結びついてきた私がいつまでも同志社を想い、その発展を願うことは、当然というか、義務だとさえ思えるのです。

「生まれるまえから」というのは、私の父（有賀鐵太郎）が同志社大学を出て神学部の教授になっていたというだけでなく、私の母（ひで）の兄3人（勝見徹郎、司郎、精史）が同志社中学校と大学の卒業生、母と母の姉妹3人（周千代、安田登代、赤間嘉代）が同志社女学校と女専の卒業生、私の長姉（有賀のゆり）も同志社女学校と女専の卒業生（のちに同志社女子大学教授）、さらに次姉（木田みな子）ともう一人の姉（佐藤恵子）も同志社女子中高と大学の卒業生、そのうえ、のちに私と結婚することになった勝村叡子さんも同志社女子大学の（数年間は講師もした）卒業生だからです。

さらに、私が生まれ育ったころの同志社はまだ規模が小さく、キャンパスも今出川だけでしたから、同志社の教職員は家族ぐるみで付き合うことが多く、同志社全体が一つの大家族（私たちは同志社ファミリーと呼んでいました）でした。そして今出川キャンパスは私たちの交流の場でもありました。毎年開かれていた全同志社イヴ音楽会や同志社混声合唱団によるメサイア演奏会には小学生のときから聴きにっていました。ですから、（同志社小学校はまだ存在していませんでしたので）同志社中学校から大学院まで一貫して同志社で学んだ私の心が今も同志社とつながっているのは、ごく自然なことなのです。

■ カナダでの私

そんな私でしたが、1964年に修士号を得て国立大学に就職し、さらに博士号を得てドイツやカナダでプラズマ物理学研究者として生活をするようになった1973年以降は、私と同志社との関係は次第に薄くなっていきました。当時のドイツやカナダには同志社校友会の支部はなく、卒業生に出会うこともほとんどなかったからです。同志社校友会から送られてくる **The Doshisa Times** と親族や同級生からの手紙が、辛うじて私と同志社をつないでいてくれました。

カナダ初の同志社関係者のグループである「同志社トロント会」ができたのは、18年ほど前のことです。会長と事務局長ら数名で構成される幹事会によって運営されてきましたが、定住者の数が少ないので会員数も一定せず、折に触れて食事会や野球観戦やボーリングなどを楽しむ「同好会」の域を出ませんでした。

それでも数年前に、当時の幹事会が同志社トロント会を同志社校友会トロント支部にすることに決めて私を支部長にしました。けれども、これは単に名目だけで、支部の運営は依然として支部長抜きの幹事会が担ってききましたので、親睦グループとしての活動は継続してきましたが、残念ながら、いまだに支部規定もなく、校友会会則に示唆されている「母校の発展に寄与する」類の活動は見受けられません。

■フルートと親しむ

音楽に関しては、私の父はクラシック音楽が大好きでしたし、3人の姉たちも熱心にピアノを習っていましたので（そのうちの2人は海外に留学し、プロのチェンバリスト、またオルガニストになりました）、私のクラシック音楽への関心と感性は子供の頃に自然に身についたようです。

私が初めてフルートという楽器に手を触れたのは中学2年生のとき（1953年）でしたが、これは他人のものだったので、自分の楽器を確保して真剣に吹き始めたのは高校2年生のときでした。日本フルート界の草分けで同志社大学工学部生物学教授の山田忠男先生の門下となり、一時は音楽大学に進む気持ちにもなったのですが、これは思い留まって、同志社大学工学部電気工学科に進みました。それでもフルートを手放すことはできず、吹き続け、ドイツとカナダでもレッスンを受けました。

カナダでは、いまでもアマチュアオーケストラで吹き、個人演奏会もほとんど毎年開いていますが、東京での個人演奏会は3年ぶりです。依然としてアマチュアですので、自分の技術レベルに見合った曲を選んで、スピリチュアルに演奏することを心がけております。今回は、ヘンデル、テレマン、モーツァルト、ベームなど18～19世紀の曲と、フォーレやドビュシーなどの近代フランス印象派の曲を演奏します。

■ 学者から牧師へ

フルートを小脇に抱え、プラズマ物理学者としてドイツからカナダのバンクーバーに移住し、ブリティッシュコロンビア大学の教員をしていた私でしたが、様々な経過があつて、牧師への道を歩むことになりました。これは、クリスチャンホームに生まれ、神学者を父にもち、同志社というスピリチュアルな環境で育つたことと無縁ではありませんが、私としては避けて通りたかった道でした。工学部へ進学したのも、神学部を避けることが念頭にあったからです。

しかし、14歳のときに聞いた神からの呼びかけを永久に拒否し続けることは不可能でした。1977年から4年間バンクーバー神学校で学び、カナダ合同教会の牧師になったときは42歳になっていましたが、カナダ各地の教会の牧師、またカナダ東部にあるマウントアリソン大学と古巣であるブリティッシュコロンビア大学のチャプレン（宗教主任）も務めました。

牧師引退後は通信教育大学院で心理学を専攻し（修士、博士）、またオンタリオ州ウオータールー大学セントポールズカレッジの特任教授として日本カナダ学生交流プログラムのお手伝いもしました。息子はカナダに、娘と孫2人はスウェーデンに住んでいます。妻と私はオンタリオ州のダンダスという町で引退生活をしています。

■ 神に導かれて

振り返ってみると、私が歩んできた道は、学生時代に予想していたものとは大きく違っていました。同志社ファミリーの一人としていつも神に導かれ、恵まれてここまで来たことを感謝しております。

カレッジソングにある「**Tho' through the world we wonder far and wide, still in our hearts thy precepts shall abide**」（たとえ我らが世界の果てまで彷徨うとも、汝の教えは常に我らの心の中で生き続けるであろう＝有賀私訳）というフレーズは、同志社から卒業生へのメッセージであると同時に神から私へのメッセージでもあったのです。神は私が歩むべき道を、同志社を通して示されたのだと、今は確信しています。 ■

*以上が有賀先生の投稿ですが、内容は、ごく控えめです。googleなどで検索いただくと更に、有賀先生の多くの業績が出て参ります。